

東北大病院 一迫特任教授ら設立

「血液アカデミー」保健文化賞

悪性リンパ腫診断システム

国内初確立「症例データ次世代に」

保健衛生分野で優れた業績を挙げた団体や個人に贈られる本年度の「保健文化賞」(第一生命保険主催)に、東北大病院特任教授で病理医の一迫玲さん(68)が選ばれた。国内初となる悪性リンパ腫の病理診断システムを苦節30年余りで確立し、診療レベルの向上や専門医の育成に貢献したことが評価された。



東北大病院の研究室で保健文化賞の賞状を持つ一迫さん
＝仙台市青葉区

全国270病院登録

一迫さんが1989年に考案した診断システムは現在、宮城県を中心に全国の約270病院が登録している。登録病院から提出された検体を専門の病理医が調べて診断書を作成し、症例を蓄積する。予後の継続的な追跡もする。



悪性リンパ腫 免疫細胞の白血球の一種であるリンパ球ががん化し、首や脇の下、脚の付け根などにあるリンパ節に腫れやしこりが出る。治療法は抗がん剤による化学療法や放射線療法が中心。国内での発生頻度は10万人当たり30人程度とされる。

悪性リンパ腫は100種以上の病型があり、型によって治療法が違う。確定診断は顕微鏡観察のほか、細胞に特殊な光を当てて性質を分析する「フローサイトメトリー」、遺伝子解析などを加味して結論を出す。一迫さんは80年代から、こうした複数の診断方法を組み合わせる診断を国内で先駆けて実践する中で、「一施設、一個人の努力で行うには限界がある」と痛感。広域的な対応が可能な診断システムを構築すれば、より多くの患者を救えると考えた。

検体受注伸ばす

2008年に設立されたアカデミーは、この診断システムを活用した疫学的調査や後進の人材育成などを主眼とする。公益財団法人の基本財産は仙台市内の私有地を手放して工面した。「積み上げた症例データを次世代の研究基盤として残したい」という強い思いからだった。

「全て報われた」

保健文化賞を受け、「目頭が熱くなったし、全てが報われた気持ちだった」と喜ぶ一迫さん。今後は人工知能(AI)による病理組織診断の実現に向けた研究も視野に入れる。「症例を蓄積すればするほど『何が分かるのか』が分かるようになる。私の一生では時間が足りない」。一迫さんは情熱の血脈を託すアカデミーの発展を願っている。

(横山勲)